

# 広報

— 5 卷 7 号 —

昭和 48 年 10 月 10 日発行

## 目次

アフリカ日食観測	日江井 栄二郎…( 2 )
白鳳丸航海 KH 73-4	浅 田 敏…( 4 )
葉山縦走記	長 田 美 子…( 5 )
私の近況	竹 内 均…( 7 )
“太田さん”有難う	前 川 文 夫 佐 藤 敏 雄 々 木 幸 子 清 水 幸 子 原 山 重 明…( 8 )
私の読んだ本 (5)	大 森 博 雄…( 10 )
私の提案 (4)	有 馬 朗 人…( 11 )
《学部消息》	(12~18)



シロバナハギ *Lespedeza Thunbergii* var. *albiflora* Ohwi

萩は日本では最も普通なマメ科植物の一つであり、また日本人には万葉以前から最も親しまれてきたが、今日まだ日本に何種あるのか判っていない。日本の高等植物フロラも未解決の問題が多い。ハギ属はヒマラヤ、中国、朝鮮、日本、オーストラリア、北アメリカに分布し、およそ 100 種あると推定されているが、いわゆる萩は東アジアに特産するもので、茎が木質になる大形の多年草で花が大きく美しいこと、閉鎖花のないことなどの特徴がある。日本の代表的な野生種にはヤマハギ、ツクシハギ、マルバハギがあり、栽培品にはミヤギノハギ、ニシキハギなどがある。写真のシロバナハギは東京で普通に栽培されており、ミヤギノハギの変種であるが、自生地は不明である。

(大橋広好: 植物)

# アフリカ日食観測

日江井栄二郎（東京天文台）

今年の6月30日に起った皆既日食を観測するため、モーリタニア回教共和国のATARというオアシスに5月28日から7月6日まで行って来た。ここはサハラの極乾燥地帯の西端に位置し、モーリタニアの首都ヌアクショットから約50km内陸に入ったところに在る。この地に定めたのは、日食観測時の太陽高度の高いこと、晴天の機会が多いこと、フランス領であった当時の兵舎が在って宿泊に使えること、器材を運搬できる道路のあることによる。フランス、アメリカ、オランダ、イタリア、スイス、ソ連と日本の7カ国の合計73名の観測員がこの地に集まって来た。

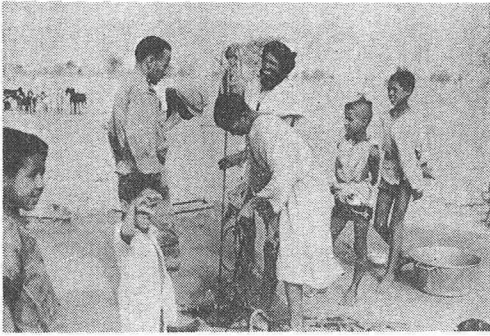
第1図はその時に撮ったコロナの写真である。コロナの輝度は太陽の外側に向かって急激に落ち、太陽中心から太陽半径の5倍離れた場所では、太陽表面に近いところに較べて約3.5桁暗い。従って普通のコロナ写真で

は、どこかが露出過多となり、どこかが露出不足となる。調べようとするコロナ全域にわたって同一の適正露出で撮るためには、中央部は透過率が悪く、外側に向かって透過率のよくなるような特別なフィルターを像のところに置き、あたかもコロナの輝度が半径方向に対し一定であるように *compensate* させればよい。第1図はこのようなフィルターで撮ったもので、普通のコロナ写真に較べてコロナの構造がはっきり見える。

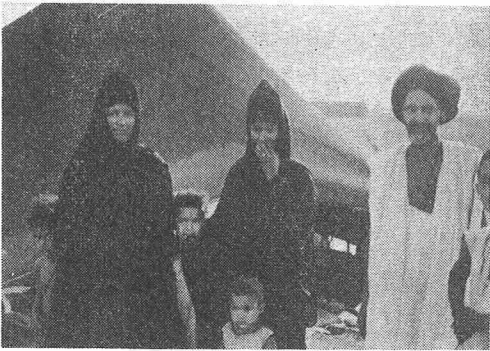
吾々の見た沙漠は、一面砂と小石混りの平坦な荒地であって、そこに棘のある木がぼつんと孤立して立っていたり、草むらがところどころにあるだけであった。どの方向を向いても地平線のかなたまでこのような単調な景観しか見えないのは、救いようのない気持ちにさせられる。いわゆる砂丘はごく一部にしか見られなかった。しかし街道は、数カ所で砂丘を横切り、そこでは砂溜りが



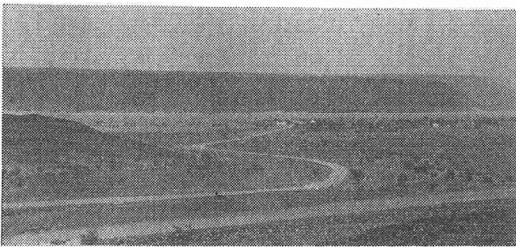
第1図 特殊なフィルターで撮ったコロナ。西側の流線がよく見える



第2図 ATAR への道筋に見られた井戸



第3図 モール人



第4図 TABLE MOUNTAIN

できていた。吾々の傭った運転手は、ハンドルをとられぬよう、スリップをしないように上手に通り返したが、外国の観測隊の中には、ここで立往生したのもあった。木々が群生しているところも見られ、このような所には水があり部落がある。第2図に示す井戸では水面まで約10m下であった。ATARの近くにはTABLE MOUNTAINが見えるし、またGRAND CANYONを小さくしたような谷も見える。勿論涸れた谷である。数年に一度大雨が降ることがあって、その時には川が流れるという。道路に

は橋もできていた。

6月における気温は、午前時が最低で26~28度、午後3時が最高で42~46度であった。毎日ほぼ規則的な波型の変化をする。午前9~10時における気温が平均より3~4度高いと、その日の昼近くから砂嵐がおそってきたり、HARMATTENになることがわかったのは、滞在も後半になってからであった。気温が40度を越す暑さになると、現地人は、頭に巻いたターバンをほぐし、眼だけ出るようにして、頭から鼻、口を覆ってしまう。彼等をまねて手拭で鼻をマスクしてみると、吸う空気が体温で冷やされるためか、吸収がいくぶん楽になった。湿度は20~30%と低いので濡れ手拭はどんどん冷える。これを鼻にあてたり、あるいは昼寝するとき頭におくと気持ちがよかった。囲りはどこもかしこも炎暑なので、冷えた水や氷はこの上もなくおいしいものと思った。一方、現地人は熱いお茶を飲んでいて。中国茶と薄荷の葉と砂糖をポットに入れ小さなグラスに注ぎ、それを3杯飲むのがしきたりと聞く。渋味と甘味と薄荷のさわやかな味がして、暑さをしのげそうな感じを受ける。

ある日夕立が降った。雨粒は大きく、身体に当たると痛さを感じ、地面には直径5~6cm四方に砂をはねあげていた。水分はあつというまに地面に吸い込まれ、あとには、月面のクレーターに似た形が残された。初めは毎秒1m<sup>2</sup>当りに約1ヶのクレーターができていたがそれが10cm<sup>2</sup>当りになり、そのうち地面がクレーターだらけになる。その後は急に大雨となり約30分降り続いた。地面にできた水溜りを見て、大地も充分水を吸い込めたのだろうと思ってほっとする。その翌日は、木々の緑が実にあざやかになり、地平線の遠くまではっきり見えた。町の中にできた水溜りでは、子供らがどろまみれになって遊んでいた。

ATARの市場には、穀類、野菜、果物などは地面にゴザをひいてその上に並べて売っている。ラクダや羊の肉は塊のままを吊している。吾々の食事は、ここに一軒あるホテルの食堂を使っていたが、慣れてくるにつれ、朝食は市場でパンを買ってすますようになった。長さ約40cmのフランス・パンが約30円で買えた。市場の廻りに遊んでいる子供達を見ても、やせ細ったのを見たことはなかった。新聞に報道された飢餓は、NouakchottとATARの道筋にはうかがえなかった。

## 白鳳丸航海 KH73-4

浅田 敏 (地球物理)

7月5日東大海洋研所属の白鳳丸(田玉船長)は晴海埠頭より85日間の外航に出発した。この航海はGDPの一環をもちかねている。この船はうすいページュにぬられ煙突には東大のマークであるイチョウのしるしがついている。1967年以来活躍しているわが国では数少ない専用の研究船である。6基のディーゼルエンジンをそなえた電気推進方式をとっており、プロペラは二軸で、船首にはバウスタスターを持っているので3000トンの船体をきわめて微妙にあやつることができる。

研究員の室は15あり一室に2人が標準である。主席研究員(海洋研友田教授)とそれを補佐する次席研究員(海洋研小村助教授)の室はブリッジのすぐ下の階にあるが、この階は研究員室のある階の2階上にあたる。

食費は1日400円で夜食も出る。食物のことで文句を言う人はいない。その上すべての研究者は大量の飲みものと食いものを自分用にも持ちこんでいる。

研究室は第9までであり我々の目的には十分である。

この航海の前半の主目的はマリアナ海盆で、long range shot、長距離爆破の観測を海底地震計によって行なうことである。測線の長さは1500kmにおよび、このような規模の観測が大洋底について行なわれた例はまだない。

GDP(ジオダイナミックプロジェクト)の一部としてこの観測を行なう理由は上部マントルに存在すると考えられている低速度層のものをできるだけ定量的に知ることである。これまでの低速層の研究は大部分表面波を用いて行なわれたのであるが、これには表面波の性質上どうしてもあいまいさがつきまとうからである。

我々の用いている海底地震計はアンカードブイという方式によって設置される。これはカプセル型の地震計をロープで海面上のブイとつなぐ方式で、ロープの下端には錨がつけてある。

我々は6000米の深海に地震計を入れるのであるからロープの長さは8000米くらい必要となる。ブイをつかって海底に測定装置等を設置する方式のことをブイテクノロジーといって米国で特にくわしく研究されている。事柄自体はきわめて簡単明瞭であるが、実際はそう簡単ではない。

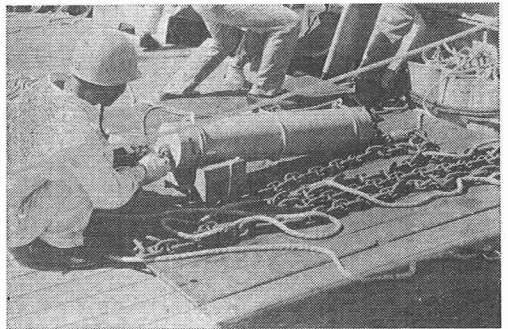
東京港を出てから甲板部の人々はただちにロープ関係

のしたくをはじめた。地震計は5点に入れるのであるからロープは全部で40kmになる。ロープは甲板上に「コイル」され、錨やチェーン等の部品が甲板上にならべられる。

40kmの長さのある直径12ミリのナイロンロープを処理するのは大変な仕事である。この準備だけで1週間はかかる。この準備がほぼ終わった後、今後の大仕事にそなえて一息入れるため13日にグアムに入港した。

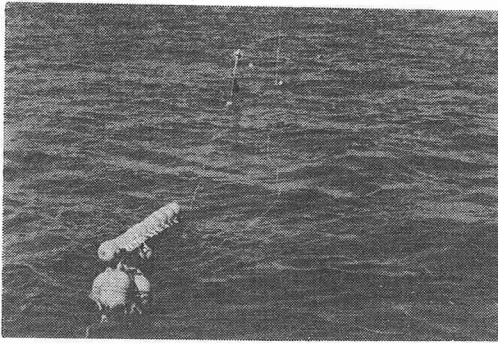


地震計のためのナイロンロープの一部。ロープの直径は12ミリでエイトアミというあみ方になっているのでよじれない



耐圧容器に入った地震計、甲板上での準備。地震計の全組織はきわめて小さくまとめられている

グアムは熱帯の島、せまくて特別なものは何もない。特産物もない。しかし訪問も二度目三度目となると土地の事情もわかり、となりの町のような気がしてくる。バスなどはないので紳士風の人々はタクシーにのり、ずうずうしい人々はヒッチハイクなどをして見物した。利口



手前よりメインブイ、標識ブイ。これらが 8000 m のロープで海底の錨とつながれている。地震計はパイレネロープくさりによって錨につながれている



ドレッジの成果。6000 m 海底の岩である

な人々は後のセブ寄港にそなえドルは1セントもつかわず、少し足りない人々は大いに散財した。セブはフィリピン第二の都市であり、物価は東京の1/8 であるという。

3 日間の休息ののち目的の海域にむかう。爆破をうけもっている東海大学の望星丸（林船長）が7月末に現場に到着するので、それまでに地震計の設置をしておかなければならない。5 点の観測点が 500 km の間に 125 km の間隔で配置される。それぞれの点に 2 乃至 3 コの地震計がおかれている。

7 月 24 日早朝南太平洋上最南端のサイトより 1500 km 北方で望星丸とランデブーする。白鳳丸は望星丸と同伴、望星丸は海中爆破を行ないながら南下する。主席は科学博物館村内氏がつとめる。白鳳丸の同伴は航海衛星による位置の精密な決定のためである。爆破は大小あわせて 61 回であった。1 トン以上の爆破はたいへんな大仕事である。

最後の 56 発は 100 kg 以下であるが、測線の上を 10 ノットで航行、ほとんど連続的に爆発を行なう。その間白鳳丸は一点でドリフトし、ハイドロフォンで記録を行なう。この 51 発は数時間で完了し、その間に記録は解析され、走時曲線がつくられる。目のまわるいそがしさであるが、これが伝統的な海底地殻研究のやり方あ

る。地震計組は設置がおわってしまうとやることがない。気象大田教授の模範演技？を見物することとする。

28 日に予定の爆破は全部おわり、4 日間をかけて地震計を回収、グアム入港の 6 日まで南太平洋上をはしりまわる。白鳳丸ははしりまわるだけでデータをためこむことができる。その“たね”は航海衛星による位置の決定（±30 m）、船上重力計（友田型）による重力の測定（±数ミリガル）プロトン磁力型による地球磁場の測定・超音波による深さの測定等である。

望星丸は一足さきにグアムに入港、のりこみの諸氏は骨休みと見物。白鳳丸は 3 日おくれて 8 月 6 日にグアムに入港、筆者をふくめて一部の人々は望星丸にのりうつり、そのまま清水港にかえて来た。

データは目下整理中である。これも海上作業におとらないほどの大仕事であるが、なんといっても最大の労働は白鳳丸が 9 月 25 日に 85 日の外航からかえて来て、8 トン積みと 10 トン積みのトラックが理学部三号館に器材を満載してやって来たときであった。1 日に「16 トンの石炭」をほらなければならぬ炭鉱夫はいかにつらいであろうか大変よくわかることになった。

## 葉 山 縦 走 記

長 田 美 子（動物）

今度はどこに行こうかしらとあてもなくガイドブックや地図を繰る時、私の目にとまるのは変わった名前を持つ

山々である。奥多摩の天平尾根、丹沢西端の蕨釣山、西上州の最南端父不見山など、皆そうして探した山であ

り、実際に出かけてその期待を裏切られたことは一度も無く、いつも静かな尾根歩きを楽しんだものであった。

今夏も7月下旬の水長沢から平ヶ岳、そして上信越の国境をたどる10日間の山行を終えた後、そうして見付けた山、山形県葉山に出かけたのは8月10日、お盆休みにはいって汽車に乗るのが一苦勞という盛夏であった。一行4名、兄や甥などとの気楽な家族山行である。10日朝8時、上野発のひばり2号に乗り、福島でをが1号に乗りつく。漸くその頃から一杯に開けた窓から入って来る田園の香りに東京のよごれた影を吹き払って、思いが山へと急速に傾斜して行く。新庄に降り立ったのが昼過ぎ、裏日本独得の蒸されるような暑さを背に今日の宿泊地、肘折温泉に向うバスに乗りこんだ。バスは土ぼこりの山村の道を抜け、最上川の谷を下ってその上流、銅山川の谷にはいる。やがて牧場に牛の姿を見る下湯ノ台高原を過ぎると月山を初め、葉山とそれを囲む峰々が美しい姿を展開する。肘折温泉は坂道を一気に下った所に不意にあらわれた街並みである。1,100年前から開けたという温泉場はいわゆる湯治場であり、92度の熱さと豊富な湯量に恵まれた半ばひなびた風情を持ち、半ば今流行の新開地的雰囲気を持った温泉場であった。

翌朝は5時出発、朝もやに包まれた温泉街の処々から湯治客の焚く朝食の煙が上っている。足音を忍ばせながら小さな神社の裏をまわって林道に向う。坦々とつづいた2車線の立派な林道で、僅かに上りながら山裾にそって曲りつつ奥へと進む。右手は祓川の深い谷で時々足をとめてのぞき込むと豪快にそそり立つ岩壁の奥に清冽な流れが見える。空を仰ぐとまだ太陽の光がとどかないうす曇りの空に葉山がなだらかなやさしいシルエットを描いて、じっとわれわれを迎えてくれているよう。次第に濃い青に変わる空に歓声をあげ、明かるい緑の木の間からさす朝の光の美しいブナ林に嘆息をつく。7時、左沢からの林道との分岐で朝食、食事後分岐を左に、アラム沢に沿った林道を進み、やがて沢と別れて右手に山腹をまいて行く。行手に葉山のなだらかなスロープを見、チェーンソーの音の響く林道にウグイスやホトトギスの声

が耳を楽しませてくれる。何時の山行でもどこかで、何でこんな辛い思いを、と思う時があるものだが、今回の葉山のくれた落し穴も朝食後の2時間。やがて8時をまわり、白い雲が風と共に遠くに運ばれて行くと真夏の太陽が容赦なく照りつける林道歩き、去年の夏、南アから下りて来た道もこんなだったと思い出しているうちはまだ余裕がある間であり、林道歩き4時間の終りにはブラウスはしぼるような汗、気楽なおしゃべりなど忘れたように黙々と足を運ぶの

み。途中伐採のための地図にない道が出現したりして行きつ、もどりつするので暑さは増すばかり。ようやく葉山登山口三本橋沢入口の道標を見た時の嬉しかったこと(もっとも下山後聞く所によるとこの林道4時間は地元の人でも歩かず、温泉から車で来るとのこと、しかし今考えるとここを歩いてこそ今回の山旅の収支があった感じで良かったなと思ったのだが)。

葉山本流一の沢の流れは原始林のトンネルに包まれた美しい沢である。流れに果物を冷して食べ、冷たい水を飲む。今までに味わったことがないような何ともいえない軟かい感触の最上等の飲み物にみんな大満足、この一瞬のために山に来たのだといたくなる程の楽しい休息である。そしてあくまでも澄んだ美しい流れを見ていると過去の山行の様々な記憶が甦って来る。

11時、時間のたつのを惜しみつつ出発、沢をつたって登ると葉山頂上直下に出る筈なので安心してどんどん高度をかせぐ。次第に細くなる流れの中を岩から岩へ跳んだりよじのぼったり、沢歩きの爽快な一刻である。原始林のトンネルが次第に両側から迫る頃涸沢となり、あたりも低い灌木に変わって来る。再び太陽の強烈な洗礼を受けると同時に可愛らしいお花畑に飛び出す。紫色の名の知らぬ花がひっそりと淋しげに咲いている。花の頃はさぞきれいだろうとちょっぴり残念。葉山頂上まで約10分、12時半、山頂をふむ。頂きは数峰にわかれ、本峰には新しい小さな社殿があり、石の大黒様がちょこんと坐っておいでだった。360度の展望が得られるという山頂も折から湧き上って来たガスのために空しく、さっきまで見えていた月山も姿を隠してしまった。しかし人影一つない静けさが何よりも嬉しく、下界の騒音などどんなに耳を澄ましても聞こえて来ないのだから万才だ。ゴヨウマツ、ミネカエデ、ジャクナゲの群落に覆われた山頂にわれわれ4人の声のみが響き、それも四方の山々に吸い込まれて行く。無数に積まれた石の山は、石を積みお金も積もるといふ信仰からとのこと。昼食後、ゆっくりと石の椅子に坐っていると、まさに私の天国に遊ぶ感が深い。

14時、未練を残しつつ出発、葉山の最高峰大森山が優美なドームを見せているが、展望を得られないこともあって通過。再び登りにかかって大ツボ石の頂上をふむ。古い火山である葉山の火口壁が富並川に落ち込む断崖と共に荒々しい景観をなし、今までの女性的なお山の姿から一変して男性的な様相を呈している。山のいろいろな姿の移り変りは驚く程。それからは刈り開きのない丈なす草をわけてひたすら下る。再びぽっかりお花畑に出るとまたその穏やかな優しい山に帰った葉山の姿を見

てほっとする。次第に陽が西に傾き、夕べの気配が濃くなるにつれて道が細く消え、踏跡を探しながら歩くようになる。時折行きつ、もどりつ、というもどかしさ。それでも灌木帯が終り、美しいブナ林などに慰められつつ、磁石の東を指す方向に強引に下る。道標の少ない山の楽しさかもしれない。

夕闇迫る 18 時、山の神、大円院跡分岐に出て一安心、大円院跡に出る筈が山の神の道を来てしまったことがここで判明、大笑となる。でもこの分岐に古びた可愛らしい石の道標があり、ひらがなで“右やま”“左はやま”とするしてあるのがいかにもお山という親しさが感じられて印象的であった。

宿泊を無理にお願いしてあった大円院に着いたのは 18 時 45 分。冷しておいて下さった西瓜のおいしかったこと。1 日 14 時間、歩き続けた楽しさが身に滲みて感じられ、一段とおしゃべりのはずむ夕食であった。今日一日で会ったのは地元の人らしい 4 人連れの 1 パーティ

ーのみ、静けさを求めて山を歩く私達には 100 パーセントの満足を与えてくれた素晴らしい山であった葉山。お寺で聞いたその名前の由来は「この山には他に見られない程草木の種類が多く、820 種にのぼるといい、寺は医王山と号す」とのこと。そのお話の端々にあまり有名になって登山者が多くなることを望まないこと、本当にその土地の人々のお山として愛されていることがうかがわれ、申し訳ないことをしたように感じて思わず顔を見合わせる。東京からわざわざ来る人はまずないね。なぜ来たのかと聞かれて、わが選択に鼻を高くする一方、お山を冒したおわびにちょっぴり首をすくめる私達であった。

翌朝岩野の部落から奥羽線楯岡に出て、臨時急行で帰京。上野の駅で再び都会の騒音の中に立った時、また次の山行を夢見ていることは何時の山旅の後でも同じ私であった。

---

## 私 の 近 況

竹 内 均 (地球物理)

私は福井県生まれの田舎者であって、ただもう働くことが大好きである。ただその働き方には注文があって、願わくは自分の好きな仕事を朝から晩までやらせてほしいと思っている。ただ思っているだけでなく、そういう気ままな仕事ができるように、私は私なりの努力をしてきた。ふり返ってみると、そういう気ままな仕事をするのが、私自身を生かした社会に報いるもっとも良い方法ともなっている。

ふしぎなことに、そういう仕事をしているうちに、大学でいただく給料の他に、いくらかの金が入ってくるようになった。正直のところ、私はこのような金を得ようとして働いたのではなく、私なりの仕事をしたかったからこそ働いたのである。この主旨をはっきりさせるために、私は最近私の得たこのような収入の 1 部を社会に還元し始めた。さしあたりは、1 年に 100 万円程度の金をこの目的のために使うつもりでいる。昨年は「地球科学の諸問題」と題する本をつくって、豪華房という本屋か

ら出版し、その初版の 500 部を買いて、これを同学の人たちに配った。題名からすると、この本は地球科学に関する哲学的考察をした本のように聞こえる。しかし、実はそうではなくて、この本は地球科学における問題集であり、その意味で具体的に多くの人々に役立つであろう本である。

今年は「日本列島の地球物理学および地質学的調査」ということで、理学部に 100 万円の寄付をさせていただいた。これは日本の各県ごとに約 5ヶ所づつ、地球科学的にみて興味深い場所を選んで、さしあたりそれらの写真を撮り、また地球科学的記述をするという計画である。今私の研究室の連中が手分けして日本全国をまわっている。きれいな写真やポイントをついた地球科学的記述もさることながら、彼らがこの旅行の間に得るであろう生の自然と人間との接触の方に、私はより多くを期待している。

## “太田さん”有難う

前川文夫・佐藤七郎・佐々木敏雄  
清水幸子・原山重明

### 太田さんの思い出

前川文夫(植物)

太田さんがなんで教室へ入られたのかは私は知らない。多分私が兵隊で中支に行っていた間のことのように。だが、太田さんが来られて、教室は大変なプラスになったことは否定できない。こんど定年で退職されるのは、教室としては大きなマイナスで、できれば特例を作ってもう少しのばしたいと思っているのは私一人ではあるまい。

太田さんは人一倍地味な人柄である。会であれ、人の集まるところにはでたがらない。一寸はがゆい程に控めである。教室には教室会議があって、誰でも出てほしいのだけれどもこれにもめったに顔を出さない。

それでいて、太田さんは人一倍親切な人柄でもある。植物学教室の図書も年々ふえて、その所在に困り、それほど必要でないものは棚の最上段に挙げたり、別室へ持って行ったり、四苦八苦の態たらくであって、分類に関係した書物が得てしてこの厄にあったのだが、それをよく覚えていて、いうとすぐに出してくれたものである。私などは大分そのおかげを被った。今でも感謝しているところである。何の気なしに、話したことについて、二三日するとそれに関連した項目で、数冊の本が揃って出されていて、先ずあつけにとられ、ついでいたく感激したことも二三にとどまらない。

そして太田さんは人一倍規帳面な人である。図書は借りたら返すのが本則であって、だから返済日時を必ず書き込む。ところが申訳ないことだが、時に忘れる、イヤ覚えていてそれで返しそびれていることもある。そういう場合、返済の日付から少し経っている時、何気なく傍に寄って来て、一寸一言、いうのである。それが痛く身にこたえて、アタフタと返しに行ったことも、おはずかしながら何回かあった。こうして教室の図書はよく整頓され、よく活動している。太田さんの地味だが、抜目のない努力がこの図書を全くしていたといっても過言ではない。

今回9月30日で停年退職されることになったときい

た時、以外に速い退職と思込んだ。それ位太田さんは図書以外の事柄には触れたがらないのであった。今後どうなさるのかも知らないが、御健勝を祈るや切なるものがある。

### 図書守り太田さん

佐藤七郎(植物)

私が田舎の高校から進学してきて初めて教室の図書室を案内されたとき、どういうわけか、そのイメージが神域という感じをうけたのを忘れることができない。重い扉でさえぎられて薄暗い書庫の奥深い静けさ、壁面高く掲げられた歴代教授たちの少々大きすぎて威圧的な肖像画などがその舞台装置だったが、戦時中という時代のふんいきでもあったのだろう。そこで働いておられた太田さんは巫女のようにみえた。

戦争中、欠講が多いころ、私はその書庫の中に閉じ込めることが多かった。文字通り万巻の書に囲まれて好きな本を自由に読めるのは楽しかった。連日空襲におそわれ、いよいよ末期に近づいていた戦争の喧噪からそこだけは完全に隔絶されてあった。聞こえてくるものといえ、太田さんのたたく軽やかなタイプの音と、ときどき書庫に出入りされる太田さんのかすかな気配だけだった。太田さんのタイプの音がしばらくの間止んだときに私はノートを閉じて帰宅の仕度をはじめればよいのであった。本郷地域が一面の焼野になってしまった日にも太田さんはそうして静かに働らいておられたように思う。

戦争が終って教室の中に若い人もふえて少しは賑やかになったころ、植物教室の七不思議というのが伝わったことがある。そのひとつに太田さんのお年があった。当時の先生方はごぞんじだったのかもしれない。けれども若い連中には誰にもそれがわからなかった。20才代とも30代ともそれ以上ともいわれた。ことさらに詮索してこの不思議を解いてしまおうとする者もいなかった。だから私には、2年ほど前、太田さんが近く停年だと知らされて驚くまで、それが不思議のまま残っていた。

太田さんが教室にこられてから、ずいぶん多くの方が太田さんのお世話になっている。教室に來り去った人で



太田さんを憶えていない人はいない。そのことを思うと長い年月が経ったと思う。しかし一方、この間に、太田さんの誰彼のへだてのない心のこもった親切と行届いた完璧のサービスは少しも変らなかつた。それどころか、この間に太田さんはドイツ語、ロシア語、ラテン語を習得して既得の英仏語に加えてサービス領域を広められた。太田さんが欲しがっていたロシア語のタイプライターを備えてあげられなかつたのが図書係りとして長年にわたっているいろと我まをきいていただいた私の心残りである。

太田さんは真底から本が好きで図書のお守りをしておられるようであった。太田さんの勤勉、図書利用者への親切、相手を分けへだてしない言葉遣い、ていねいな図書の取扱い、徹底した参考サービス、そして失なわれた図書への思い遣り、そういったものはすべて太田さんの図書への限りない愛情からでたものであったと私は思う。

うかがうところによると、太田さんは退職後はゆっくりと読書の生活を送るのを楽しみにしておられるとのことである。

## 太田さんと図書館

佐々木 敏雄 (農学部図書館)

太田さんとの出会いは、終戦後のまもないころ、一利用者として植物の図書室を訪ねた時であった。1800年代の中ごろに出版された隠花植物に関する本のことであったが、太田さんは直ちに、「その本は日本には一冊しかなく、北大の宮部先生がお持ちです。」との答えであり、その広い知識にまず驚かされた。その後もいろいろとお世話になったが、このような人のいる図書室を利用できる植物の研究者を常にうらやましく思っていた。

図書館に関係することになってからは、お世話になったりなれたりであったが、農学部の図書館職員は、理学部植物からの参考質問は、余り歓迎していないようであった。というも、太田さんが調査されてわからないものがくるので、むずかしい質問が多く、その多くが回答不能であるというのが理由らしい。図書館職員が太田さんから刺激をうけ、勉強になった点ははかり知れない。

大学の図書行政を考えてみると、学科単位の小図書室には多くの問題がある。職員数が1~2名という職場では、病休や年休をとるにも不自由であろう。また研修などは、図書館職員としては不可欠のものだが、出席もなかなかできないであろう。待遇の面でも、係長のポスト

を設けるのも困難で、不利な身分におかれる場合が多い。

太田さんの図書館における業績を考えると、東京大学における図書行政の貧困さが痛感され、早い機会に改革してもらいたいものと思われる。

## 太田さんお幸せに

清水 幸子 (総合図書館)

「植物の大田さん定年で退職なさるそうよ」「もう定年ですって、髪は薄いけれど、お若いのでその様なお年とは思ってもみなかったわ」

これは或日のお茶の時間の会話です。この事実は私達にとって寝耳に水でしたので、ただ驚くばかりでした。

個人的なお付き合いはありませんでしたが、仕事を通じての大田さんは、親切で、謙遜家で、その反面真の強さをお持ちになり、木目の細やかさを感じさせるお人柄の様にお見受けしておりました。三年位前でしたか、図書館の中でお会いした所「ドイツ語の研修ですの、続けておりませんと忘れてしまいますので」と云うことでした。その一年位前にも一緒にロシア語に出ていた筈なのに、普通の方なら恐らく、もう年なのでと止めてしまうだろうに。この様に地味な積重ねを怠らず、努力と情熱を仕事に傾けていらっしやった姿が目に残ります。

こちらからの依頼に対して、出来得る限り調査して適確なる Information を与えて下さり、一気に話される独特な早口は忘れることが出来ません。

総合図書館の Reference work の範囲が広い為、高度な専門的な分野は、学部図書職員の援助なしには出来ません。特に自然科学を専攻した職員は数名ですので、専門知識 (Librarian としての) を豊富に蓄積していらっしやった太田さんの存在価値は多大でした。図書館学の発展に従って、理論が先行し実際が伴わず、地味な仕事を嫌う人の増えてきている昨今、良き意味でも悪しき意味でも大変貴重な模範であると思っています。研究の蔭の力となった実績は計り知れないものがあつた事と思います。又私達も何かと教えられ、反省させられ与えられた影響は大きく、Specialist として非常に惜しまれる数少ない人材であると痛感致してをります。今後の御多幸を祈って。

## 畏れ多い太田さん

原山重明(植物)

植物学教室図書室の主、太田さんが今月限りで定年退職される。若き日々、彼女に情熱を傾けた古参から、彼女がもう定年の歳である事を知って驚く新参まで、いろいろの感概を持って彼女を送ろうとしている事と思う。日頃から、彼女に世話をかけっぱなしの、なまけもの大学院生が、送別の辞など畏れ多い気がする。だから、何故畏れ多いと感じる様になったのかを、少し書かせてもらおうと思う。

① 僕はドイツ語が全然駄目である。だから、ドイツ語の雑誌のタイトルを、今だに正確に読む事が出来ない。「この……という本(ドイツ語)を借りたいのですが。」と本の名を、英語・フランス語・ローマ字流ミックスに読むと、太田さんは、それを読み直しながらメモを取っていく。(彼女の発音が正確か否かを僕は判断できないが、皆の話だと彼女はドイツ語はもちろんロシア語の勉強もしているのだそうである。)だから僕は彼女にコンプレックスを感じている。

② 毎年、新年のおとそ気分がまださめない時期、図書室に現われた我々は、必ず太田さんの丁寧な新年のあいさつを受ける。品の一かけらもない研究室の雰囲気染ってしまった僕は、その時、失ってしまった礼を想い出す。そして、折目正しい彼女に、生れか育ちか知らないが、そんな差を感じている。

③ 一度、1800年代の論文を読まなければならない破目に追いこまれた僕は、それを捜しに図書室に行った。そして、その本が、植物学教室蔵書としてあった事に驚ろかされたが、それよりも、その本を、太田さんが、狭い空間の中にならず高く積まれた本の山の中からすぐ見つけ出してきた事にはもっと驚ろかされた。見かけの雑然性と能率性と必ずしもパラレルでない事を彼女に知らされた思いがした。

くだらない事で紙を使い果してしまった。畏れ多い太田さんが去ってしまわれたあと、我々は多くの不便に直面する事と思う。しかし、その不便解消の努力を新しい司書の方一人に負わせる事なく、皆の知恵と協力で、新しい、一層便利な図書室づくりをしていかねばならないと思う。

### 私の読んだ本(5)

杉村新著

## 「大地の動きをさぐる」(岩波書店, 1973)

大森博雄(地理)

地殻運動、特に地震に関しては多くの人々が興味を持っている。マスコミでも、最近の地殻運動の成果を紹介し、「海洋底拡大説」というような用語は、その内容をいちいち説明する必要がないくらいである。この本の題名を一見した時、このような最近の地殻運動の研究成果の解説書であろうと予想した。しかし、本書の目次を見、パラパラと目を通した時、予想はみごとにはずれ、寧ろ、大きな興味をいだかせた。プレートテクトニクスや海洋底拡大説という言葉が本書の中にみいだすことができなかつたからである。

著者は高校時代の地殻運動に対する興味から筆を起こし、研究生の半生をふりかえる。活断層や活褶曲のような“生きた地殻運動”について述べている。地殻運動のさまざまな現象の基礎的な解説と同時に、著者が地質

学者であることからくるのであろうか、歴史的にみた地殻運動の“現在”の位置付けに迫ってくる著者の研究過程が彷彿としてくる。

著者はまず、山形県の最上川の支流小国川において、第三紀層の褶曲構造と段丘面の変形とが一致することをつきとめ、活褶曲の確認をする。そしてこの活褶曲は少なくとも洪積世後期から現在に至るまで継続的に運動したと考える。

次に、房総半島の各地で、関東地震にともなう隆起量の約11倍の高度の所に、縄文時代に形成された海成段丘の存在するをみいだす。そして、地質時代から現在まで地殻運動の速度は一樣であるという考えに至る。

さらに、木曾川の阿寺断層の研究において、断層運動の速度は一樣であることを確認する。また、<sup>14</sup>C法によ

る河岸段丘面の年代と面のズレとの関係から運動速度を知り、それとズレの証拠の最大のものと関係から、運動は約100万年前から起こったと推定した。

小国川においても、約100万年前から褶曲運動が起きていることをつきとめる。さらに、関西の六甲山地においても、約100万年前から地殻運動が開始されたという資料等をあげ、最近の100万年間は地殻運動の激しい時期であるという結論を導き出している。現在は地質時代を通して、地殻運動の激しい時期なのか、現在生起している地殻運動様式は何時始まったのか、それ以前の地殻運動とどのような関係にあるのかといった疑問に対して、一つの答を与えてくれている。

このほかに、水平ズレ断層の分布が非常に系統的な格子模様を示すこと、この格子模様や断層のズレの方向は力学的にみて、日本列島が東西に圧縮されていることを示唆していると指摘している。でたために発生すると思われがちな断層が、その実、秩序だてて存在すること、個々の小さな断層が日本列島全体を押すような力と関係していることは興味深い。

さらに、全国の主要都市で問題になっている地盤沈下は地下水のくみあげによる沖積層の収縮によるもので、地殻運動とは異なるものであること。かつて、地殻の上下運動の反映と考えられた洪積世以降の海進・海退は氷河の拡大・縮小による海面変動によって生じたものであることも説明されている。これらの問題の検討は単なるトピックではなく、著者の研究を進展させる上で必要な

ことであったこともわかる。

本書は「岩波科学の本」の第8巻として、中学生・高校生を対象に書かれたものである。むずかしい事柄がやさしい言葉使いと解説的な文章で書かれ、親しみやすい。著者の研究生活上のエピソードが各所に盛り込まれていることが親しみやすさを倍加させている。また、著者も“自讃”するように、写真や図版の配置や描き方に新しいくふうをこらしていることにも好感が持てる。

さて、本書には、プレートテクトニクスや海洋底拡大説などマスコミで盛んに取り上げられている言葉は使われていない。使われていないばかりか、それらの考えさえも紹介されていないのである。著者はすでにプレートテクトニクスについて何編かの論文を書いている。活断層の格子模様や海底の大断層についてまでは筆を進めながら、何故だろうか。

本書は研究経過を述べることに多くの紙数を費している。著者自身が実際に野外で調査し、体験した経過であるから実感がこもっている。研究成果の出る過程と研究生活のダイナミックな動きとがバランス良く描かれている。著者はプレートテクトニクスをことさら取り入れることにより、本書が一般的に地殻運動の解説書に陥ることをさけたのではなからうか。一研究者の研究生活の半生をふり返えることによって、“科学する”ことの“おもしろさ”を本書は教えてくれているように思われる。

#### 私の提案(4)

## 羽田 ショック ?

有馬 朗 人 (物理)

小堀さんから久しぶりにお電話をいただいたらば、「何か提案を書け」との御依頼でした。どうもその裏は「やつはしょちゅう文句ばかり言っているのだから何か書けるに違いない。時間もないことだしあいつにたのめ」てなわけじゃないかとかんぐる次第です。でも小堀編集長の御依頼はことわりなく、まんまと引き受けさせられたわけです。ところで何を提案しようかなと考えるとどうもあんまり素晴らしいものはなく、多くの方々が実現の可能性の有無にかかわらず素晴らしい提案を既に方々

で述べられますので、私の出る幕ではなく、大いにあわてました。となると、一層のことうんとどろくさいことを一そのかわり実現性は多いものを1つ2つ書いてみることにします。

この頃はあまり言わなくなりましたが、「羽田ショック」という言葉がありました。この言葉が持っているいろいろな意味のなかで、私にとって一番のものは街の溝や便所の臭さでありました。ところが大学へ来てみると、この便所がまた、ぼろで臭さくて、つまっているな

るてことがしばしばです。せめて大学の便所ぐらゐは、臭くないきれいなものにならないものでしょうか。古来日本では便所は不浄な場所であるわけですから、くさく汚れていることはあたりまえで、皆がまんしているのでしょうか。理解に苦しみます。

ところで物理研究室以外ではそういうことはない？と思いますが、すくなくとも物理(5号館)の廊下の壁のきたなさは天下一品です。そして部屋のガラスも指で字がかけられるくらいほこりがついてる所が多いと思います。物理屋はいろいろ式を書くことが多いので、わざわざそうするむきもあるかも知れません。この夏2ヶ月ばかりオックスフォードの核物理教室(Department of Nuclear Physics)で暮らしたのですが、夏休み中にちゃんとガラスふきが来て地階から七階まで実にきれいにふいて行きました。なんとかこれくらいのは東大ともあろう所ができないものでしょうか。廊下だってちょっと一というとなんな金はないという声がすぐ聞えて来そうですが一手を入れればきれいになると思います。あんまり廊下がきたなければビラを張ってかくしてやろうという気にもなるでしょうし、つばもはきたくなるでしょう。と言え各教室や、各研究室だって、夕方になると掃除係が来てきれいにするということが常識みたいと思うのですが、我々の身边ではそういうことがありません。他の教室ではいかがでしょうか。

環境がきたないなんてことにやきもきするのは、お前さんの研究心や学問に対する情熱がたりないからだなんて言われそうですが、私はそう思いません。ともかくも

うすこし大学をきれいにしたいと思ひます。一ただし机の上の書もつのは除いて下さい。

もう一つ大変話が飛びますが書きたいことは旅費のことです。国外出張はいわづもがな一私も外国への出張をかなりしましたが、大日本国から出張費をいただく光栄に浴したことはただの一度もなく残念に思っています。何時もブラジル、ギリシヤなど経済的にめぐまれない国を含めて相手持ちで出掛けています。どうも太鼓持ちのようで肩身のせまい気がしています。国内の学会出張ですら年にただの一回、しかも赤字が出るようなのは大変困ります。他のお役人の方々のように出張すると黒字がポケットに残るとまでは行かなくとも良いですが、もうすこし増せないものでしょうか。我々自身の出張費もさることながら、もっと、外人を呼んだり、国内でも同じ仕事をしている人を気軽に呼んで討論や研究が自由に出来るようにならないものでしょうか。セミナーに呼ぶ旅費のわくすらないなんてというのは全くあきれます。こんなにきゅうくつな国は世界でも珍らしいのでわないでしょうか。

1 講座か2 講座に1人ぐらゐは流動的に外人がどんどん来ていてしかるべきです。学振を頼めば良いと言っても、うんと前から準備してしかもきまるのが遅く、そして人数があまりにも少くないのではなくとも不便でしょうがありません。

今や経済大国？なんですから、もうすこしきれいな場所に、もっと外国人や、この大学外の人を自由に呼べるようにしたいと思ひますが、いかがでしょうか。

## 9 月理学部会合日誌

10 日(月)	2:00~ 3:40	理学系研究科委員会
12 日(水)	10:00~12:30	会計委員会
	1:30~ 4:00	教務委員会
	3:00~ 4:00	人事委員会
17 日(月)	12:30~ 1:20	学部長と理職の定例交渉
19 日(水)	1:00~ 5:40	教授会

## 教授会メモ

9 月 19 日(水) 定例教授会  
理学部四号館会議室 1:00~5:40

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動報告

3. 研究生入学および期間延長について
4. 学内事情報告(学部長)
5. 国立大学協議会からの大学改革案アンケートについて
6. 理学部建物について(下郡山)  
予定より若干遅れ、今年度内に契約、着工は来年度となる見込
7. 計算機実習(いわゆるソロバン塾)について(飯田)  
来年度から開始する予定で準備中。「情報科学」の講義の前に3~4 週行なう。対象は理学部全学生のうち希望者。
8. 臨カリについて(霜田)  
一般教育科目は49 年度まではいままで通り、50 年度についても変更は考えていない。51 年度からは、高校におけるカリキュラムの変更に伴い、臨カリ一般教育科目の変更もあり得る。
9. 全学ゼミナールを担当して下さるようよびかけが

再度あった。

#### 10. 評議員改選

大木教授の任期満了に伴い、後任として田丸教授が選出された。

#### 11. 会計委員会報告 (田丸)

48年度貸付金貸付案および48年度共通経費案が提出され承認された。なお消防関係の施設については全学的問題であるので、しばらく留保することにした。

研究教育のための部長保留金(約600万円)については、各教室毎に審議して1~2件の応募をして欲しい旨学部長より発言があった。

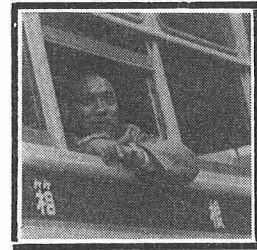
教室に昭和35年から務められるようになりました。松田さん、長い間本当に御苦労様でした。

地質学教室一同

(太田直子さんについては8頁参照)

### 峯岸竜太郎さんを偲んで

植物学教室で用務員をなさっていた峯岸さんが、去る9月5日、7カ月の入院の末、亡くられました。



理学部二号館にお出になった方なら、先生方のお顔は知らなくても、だるま大師のような風貌の峯岸さんをご存知の方が多いと思います。特徴のあるあの大きな目と、大きな声で宿直室からどなられた方も少なくないことでしょう。一見こわそうに見える峯岸さんも、旅行先などでは、十八番の「愛染かつら」をセリフ入りで上手に歌い、次々にリバイバルソングを披露して下さったものでした。今年の秋の職員旅行を楽しみにしておいででしたが、もう二度とあの元気な歌を聞くことができないと思うと残念です。

理学部に勤務して13年だったそうですが、2号館の名物男といわれ、ユニークな存在だった峯岸さんがいらっしやらなくなって、教室も大変さびしくなってしまうしました。

峯岸さんのご冥福を心からお祈りいたします。

浅見のぶ子(植物)

### 太田さんと松田さんの退職

植物学教室の図書係として昭和17年以来勤続された太田直子さんと、地質学教室の用務員として、昭和35年以来勤続された松田三四作さんが、9月30日附で停年退職された。御二人ともそれぞれの職場にあたって最善をつくされ、残された関係者はポッカリあいた穴の大きさにびっくりしているようである。御二人とも大変御元気なので、まだ時々2号館で御顔を拝見することができと思うが、長い間の御苦労に対して、理学部一同でその労を心からねぎらい感謝申し上げたい。(こ)

### “松田さん”御苦労様

松田さんは地質学教室の用務員で、9月30日で御退職になりました。67才です。地質の教室では最年長で、これで明治生れの人は教室には一人もいなくなりました。松田さんは山梨県中巨摩郡の産で、農業や造兵廠勤務などをされた後、東大工学部に用務員として務められていました。一時床屋さんをされていましたが、地質学

## 人 事 異 動

(助 手)	教室	官 職	氏 名	発令年月日	異 動 内 容	備 考
	物理	助手	森 本 喜 三 夫	48. 8. 1	高エネルギー物理学研究所助教授昇任	
	物理	助手	李 相 茂	48. 8. 31	退 職	
	物理	助手	小 柳 義 夫	48. 9. 1	高エネルギー物理学研究所助手転任	
	人 類		松 谷 暁 子	48. 9. 20	助手に採用	

物理		平 松	成 範	48. 9. 20	助手に採用
情報研	助 手	野 下	浩 平	48. 10. 1	電通大講師昇任
物理	助 手	徳 田	直 樹	48. 10. 1	休 職
物理		清 水	韶 光	48. 10. 1	助手に採用
物理		矢 崎	茂 夫	48. 10. 1	助手に採用
地物	助 手	浜 野	洋 三	48. 10. 1	休 職
生化	助 手	加 藤	栄	48. 10. 1	教養学部助教昇任

### 7 月 海 外 渡 航 者

教室	職 名	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
化学	教 授	藤原 鎮男	アメリカ合衆国	7. 1~ 7. 8	ハワイ州ホノルルにて開催される計算機利用による研究設計日米セミナー出席のため
地球	教 授	浅田 敏	マリアナ, フィリピン, カロリン公海上	7. 5~ 8.11	東京大学研究船白鳳丸に乗船, マリアナ, カロリン, フィリピン海盆の地球物理学的地質学的研究を行なう。
化学	〃	島内 武彦	ユーゴスラビア, ドイツ連邦共和国, スウェーデン, アメリカ合衆国	7. 8~ 9.18	「化学研究および教育」におけるコンピュータ国際会議「科学データ処理のための人間機械伝達」に関するシンポジウム第 27 回 IUPAC, 第 18 回 CODATA, 第 8 回 CODATA 総会出席並びに化学データに関する研究連絡
地球	〃	永田 武	連合王国	7. 7~ 7.13	ケンブリッジ, スコット極地研究所にて開催される 1973 年度南極研究科学委員会評議員会出席のため
物理	〃	吉川 庄一	ソビエト連邦	7.29~ 8. 5	モスクワ市にて開催される第 6 回ヨーロッパ・プラズマ物理核融合会議出席のため
地理	助教授	小堀 敏	アラブ首長国連邦, サウジアラビア, クウェート, イラン, イラク	7.28~ 9.15	沙漠開発事業計画調査のため
物理	〃	猪木 慶治	アメリカ合衆国	7.30~ 8.31	ブルックヘブン国立研究所にて高エネルギー物理学の研究, 討論のため
情報研	〃	国井 利泰	アメリカ合衆国	7. 1~ 7. 8	ハワイ州ホノルルにて開催される計算機利用による研究設計セミナー出席のため
物理	〃	池上 明	アメリカ合衆国	7. 2~ 9.17	ペンシルバニア大学, ミネソタ大学, カリフォルニア大学において蛋白質の構造変化の研究および研究連絡
化学	〃	徳丸 克巳	アメリカ合衆国	7.20~ 8.18	チルトン大学にて開催される有機光化学のゴンドン会議出席および IBM, BELL 研究所, アイオワ州立大学において有機化学に関する研究連絡
情報研	〃	国井 利泰	アメリカ合衆国	7.18~ 8. 3	国立医学図書館およびメリーランド大学において, 毒物情報データベースおよびネットワークの調査並びに医学情報ネットワークの調査を行なうため

化学	助手	梅沢 喜夫	アメリカ合衆国	7. 1~ 7. 8	ハワイ州ホノルルにて開催される計算機利用による研究設計セミナー出席のため
化学	助手	森山 祥彦	フランス	7.10~49.10.31	フランス政府給費留学生として天然物研究所にて研究に従事するため
物理	"	蟻川 達男	ユーゴスラビア, オーストリア, フ ランス, スイス, ギリシャ	7.12~ 8. 6	ユーゴスラビア国ベオグラード市にて開催の第8回電子原子衝突国際会議出席および欧州各国の原子物理に関する研究調査のため
人類	"	西田 利貞	ベルギー, ケニア, ザイール, ブルン ディ, タンザニア	7.21~49.2.20	野生チンパンジーの生態学的・社会学的学術調査
地球	"	石崎 克彦	アメリカ合衆国	7.25~ 8.24	サンフェルナンド地震に関する共同研究

### 8 月 海 外 渡 航 者

教室	職名	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	教授	齋藤 信房	ドイツ連邦共和国 カナダ, フランス アメリカ合衆国	8. 5~ 9.20	第 27 回 IUPAC 委員会および, 第 24 回 IUPAC 国際会議および第 7 回国際ホットアトム化学シンポジウムに出席並びにカナダ, フランス, アメリカ合衆国の研究機関にて研究連絡
地球	"	吉田 耕造	アメリカ合衆国	8. 5~ 8.20	国際海洋研究十年計画の湧昇実験に関する討論会出席
物理	"	藤井 忠男	ドイツ連邦共和国	8. 6~ 9. 5	国立電子シンクロトロン研究所との共同研究のため
天文	"	海野和二郎	フランス	8.11~11.10	パリ天文台において太陽物理学研究のため
物理	"	山崎 敏光	ドイツ連邦共和国	8.15~ 9.10	原子核構造国際会議出席並びにミュンヘン工科大学において核物理学の研究を行なう
化学	"	藤原 鎮男	ドイツ連邦共和国	8.19~ 9. 9	第 27 回 IUPAC 総会および第 24 回国際会議出席のため
天文	"	高倉 達雄	オーストラリア	8.19~11.30	連邦科学工業研究機構において太陽電波の研究および研究連絡
植物	"	飯野 徹雄	アメリカ合衆国	8.19~ 9. 7	第 13 回国際遺伝学会議出席ならびに遺伝学に関する研究打合せ
生化	"	岡田 吉美	アメリカ合衆国	8.21~ 9. 6	植物ウィルスの生体外における構造形成に関するシンポジウムに出席, 講演し, 座長をつとめ, また 2, 3 の大学を訪問し学術上の意見の交換並びに研究連絡
物理	"	久保 亮五	オランダ, フラン ス, ノルウェー, 連合王国, ハンガ リー	8.24~10. 4	統計力学国際会議出席, ラウエランジュバン研究所, トロントハイム工科大学, キャペンディッシュ研究所における研究連絡, 国際物理学連合執行委員会出席のため
化学	助教授	荒田 洋治	アメリカ合衆国	8. 1~ 8.31	スタンフォード大学において生体高分子の核磁気共鳴による研究を行なうため

地 理	"	鈴木 秀夫	オランダ, スイス 連合王国, フラン ス, スペイン, イ タリア, ギリシャ オーストリア, ド イツ連邦共和国	8. 3~ 8.24	ヨーロッパ研修団の指導および地理学 関係施設視察のため
化 学	講 師	斎藤 太郎	アメリカ合衆国	8. 9~ 8.19	国際有機金属会議出席のため
数 学	助 手	榎本 彦衛	オーストラリア	8.10~ 8.26	国際群論会議に出席し講演
生 化	"	加藤 栄	アメリカ合衆国	8.10~ 8.24	ゴードンコンファレンス出席並びに C. F. ケタリングス研究所, インディ アナ大学において生物化学に関する研 究連絡を行なう
天 文	"	吉村 宏和	アメリカ合衆国	8.15~49.8.15	国立大気科学センターにおいて太陽電 磁流体力学の研究を行なう
生 化	"	大野 哮司	アメリカ合衆国	8.21~ 9. 8	植物ウィルスの生体外における構造形 成に関するシンポジウムに出席し他の 大学において植物ウィルスに関する意 見の交換ならびに研究連絡
物 理	"	石井 力	カナダ	8.22~49.8.31	トロント大学において物理学特に低温 物理学の理論的研究を行なう
人 類	"	鈴木 正男	アメリカ合衆国	8.26~ 9.12	第9回国際人類学民族学会議参加のため
地 球	"	藤井 直之	アメリカ合衆国	8.27~49.9.3	スタンフォード大学において地球物理 特に固体地球に関する研究
物 理	"	佐藤 光	アメリカ合衆国	8.31~49.9.1	メリーランド大学において物理学特に 素粒子論に関する研究を行なう

### 9 月 海 外 渡 航 者

教室	職 名	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
化 学	助 手	中川 徹	ソビエト連邦共和 国, チェコスロバ キア, ドイツ連邦 共和国, ベルギー フランス, スイス 連合王国	9. 2~10. 5	第3回高分解能分子分光学会議に出席 並びに欧州内各国の研究所において分 子分光光学に関する研究連絡を行なう
化 学	"	竹田満州雄	連合王国	9. 7~49.7.6	メスバウアー分光法による金属錯体の 電子状態およびその化学的性質の研究 のため
数 学	"	森田 茂之	ドイツ連邦共和国	9. 7~49.9.6	位相数学に関する研究を行なうため
地 質	教 授	飯島 東	フランス	9.15~ 9.23	ボーキサイトおよびアルミニウム酸化 物, 水酸化物研究国際委員会第3回国 際集会出席のため
数 学	"	田村 一郎	アメリカ合衆国	9.20~49.1.15	微分位相幾何学の研究および教育を行 なう
物 理	講 師	矢崎 紘一	アメリカ合衆国	9.20~49.10.1	原子核物理学の理論分野での研究のため
物 理	助 手	永嶺 謙忠	アメリカ合衆国	9.15~12.31	ミュー中間子スピン回転の研究
物 理	教 授	山口 嘉夫	アメリカ合衆国	9.17~10.27	高エネルギー物理学の研究を行なうため